

複文前句における「あり」の臚化用法

山口堯二

一 はじめに

二 代理性の高い用法との差

三 複文類型別「あり」の臚化用法

三の一 「……はあれど」型

三の二 「……しもあれ」型

三の三 「……こそあれ」型

三の四 「……だにあるを」型

三の五 「……さへあるに」型

四 衰退理由と近代語の類義表現

古代語の動詞「あり」には、対比的な構造の複文において後句の事態・程度などを強調するため、前句の述語においてその具体的実質的な意味を臚化すると見てよい用法がある。その全体像を明らかにするため、動詞「あり」の上に位置して後句との対比にそなえる係助詞・副助詞と、両句の接続形式とを指標として、その用法の認められる複文構造を、「……はあれど」型、「……しもあれ」型、「……こそあれ」型、「……だにあるを」型、「……さへあるに」型に区別し、各型における両句の類義性・対義性、後句への展開における飛躍の有無、時代的分布などを検討した。近代語では衰退するが、その用法が古代語を中心に維持された理由と、それに取って替わった近代語の類義表現の存在にも言及した。

一、はじめに

古代語の動詞「あり」には、次のように対比的な構造の複文の文脈に依存して、具体的実質的な意味をはっきりさせないまま、きわめて形式的に一つの状態などを漠然と暗示すると思われる用法がある。動詞「あり」を述語とする成分関係の主要部に傍線を付す。

(1) 雁なきて菊の花さく秋はあれど春の海辺にすみよしの
浜（伊勢・六十八）

この例の「あれど」を、手近の注釈書は、たとえば次のように解釈している。

「あれど」は「おもしろくはあれど」の意か。「住みよからずあれど」の意とする説もある。（大系頭注）

「あれど」は「おもしろくあれど」の意。〈頭注〉雁が鳴いて、菊の花が咲く秋の風光もよいが、それにもまして春の海辺に住んだらよいなあ、と思える住吉の浜だ（現代語訳）（全集）

右の二つの注釈書の解釈には共通して「おもしろく」という語が補われている。しかし、原文の前後にそれが明示されているわけではないから、このように解釈すれば一応意味が通ることはわかるが、それ以外に解釈のしようがないとは言えない。

例(1)のように係助詞「は」が「あり」の上に位置し、接続助詞「ど／ども」で後句に続く複文には、後述するようにならざる類例があつて、それらを照合すれば、このタイプの類例の場合、その「おもしろく」に相当する具体的実質的な意味を、文脈上どのように導けばよいかという、解釈の技術については、すでに共通の認識もかなりできてはいるだろう。しかし、解釈上そのように我々の手を煩わせる表現法を、個々の表現の解釈というレベルにとどめず、その時代の「あり」に認められていた一つの用法という観点から捉えようとすると、併せて考察の対象にすべき表現法が、ほかにもいろいろある。「は」と同様の位置に助詞の「こそ」「しも」「だに」「さへ」が共起する複文の場合がそれである。

結論を先取りすれば、「あり」の上に位置するそれらの助詞の違いに応じて、それぞれに相違点も認められるが、それらの助詞が共起する複文においても、「あり」の用法がその複文における両句の対比的構造に依存する傾向は共通に認められるからである。本稿はそれらの各形式における「あり」の表現性をまとめて検討し、その各複文構造に依存する「あり」の用法の特徴を明らかにしようとするものである。

本稿に取り上げる表現法に関する先行研究¹⁾の多くは、上

に共起する特定助詞との関係を中心として、その表現をどう解釈すればよいかを探ったものである。係助詞「こそ」と共起するタイプの例については、「あり」の用法という観点からの整理をめざしたものもあるが、狭義の係り結びになる単文の「あり」まで含めて処理しようとしたため、複文構造との関連はかえって軽視される結果に終わっている。したがって、本稿の企てるいわば総合的な立場からの立論には、まだ先行研究と呼べるものはない。

二、代理性の高い用法との差

これまでの研究でも、個別的には複文構造との関連にも注意されてこなかったとは言えないが、従来の研究では、本稿の対象とする「あり」の表現性も、ただ文脈に依存する用法という程度の認識において、それ以外の文構造の「あり」と同列に一括されがちであったと言えよう。しかし、本稿の対象とする複文構造に依存した「あり」については、その文脈に依存するという、依存性について、いわばその内実にも立ち入る必要があると考えている。そこで、回り道をするように見えるかもしれないが、まず対比的な複文構造とは異なる文脈に依存すると見てよさそうな「あり」の例について、その依存性の特徴を一見し、以て複文構造に依存する場合の依存性との違いを確認することから

はじめようと思う。

例(1)の「あり」は、原文の前後に何も明示されていないのに、「おもしろく」という語を補って解釈されていたが、その他の文構造への依存が認められる「あり」には、補うべき語がもつとはつきりしている例がある。(1)における「あり」の文脈への依存のしかたを探るためにも、比較の対象として、次にそのような例を取り上げてみよう。動詞「あり」を核とする文節に傍線を付し、意味上それが依存する文脈の主要部は傍点を付して示す。

(2)「いづら、はや寝給へるか」と言ひ笑ひて、人わろげなるまでもあれど、岩木のごとして明かしつれば、つとめて物もいはで帰りぬ。(蜻蛉・中・天禄二年)

(2)の「あれど」は、先行文脈「言ひ笑ひて」に依存するものとみて、「言ひ笑ひてあれど」の意に理解できる。そう見れば、この「あり」の用法は、動詞ながら意味上むしろその補助動詞の用法に寄せて、先行文脈に依存しながらその事態の継続性を表すと理解することができる。その依存する語が直上に来るいわゆる補助動詞「あり」の用法も、動詞の「あり」がこのように先行文脈に依存する用法にこそ、その成立根拠を求めることができよう。それは「てあり」の約としての助動詞「たり」の成立にも通じる見方である。

(3) いみじう心づきなきもの。祭・禊まつりなど、すべて男の物

見るに、ただひとり乗りて見るこそあれ。(三巻本
枕・いみじう心づきなきもの)

右の傍線部なども、先行文脈の「いみじう心づきなき」に依存して、動詞ながら「いみじう心づきななく(は)あれ」ないし「いみじう心づきなけれ」の意を代理していると見ることができよう。だとすれば、この「あり」も、先行文脈に依存しながら意味上その補助動詞に寄せて理解できるのである。「心づきなけれ」などの形容詞已然形にはそれ自体に「あり」が含まれていると見られるが、「いみじう心づきなけれ」の意を代理していると見れば、先行文脈への依存性はさらに高いことになる。この例については別に「こそあれ」を「にこそあれ」の意と見てしまう解釈法もあって、それも不可能とは言いつれないが、「ただひとり乗りて見る」が文脈の助けを要する準体句であるだけ、「に」の省略はむずかしいはずである。

形は動詞の「あり」でも、例(2)(3)のそのように先行文脈に依存し、意味上その補助動詞に寄せて理解できるということは、とりもなおさず、その「あり」に具体的実質的な意味の代理性が顕著だということである。言い換えれば、その語義的な輪郭が明瞭だとも言えよう。

先行文脈に依存する「あり」の例をもう一つ示す。消息

文などの引用に用いられる「とあり」という言い方は、係助詞の介入する「とぞある」や、「と」を含む「など」と共起する場合も含めて慣用度が高い。その先行文脈には「文」「返り事」「言ひて」などの語句が明示されていることもあるが、古代語では「言ふ」などの限定された言い方の代理として慣用される度合いが高いから、次のように文脈上それらの語句の明示がない場合でも、直上に引用文らしい語句があれば、やはり補助動詞に寄せて「言ひてあり」などの極めて限られた意に理解できる。

(4) 横川にもものすることありて、のぼりぬる人、「雪にふりこめられて、いとあはれに恋しきことおほくなん」とあるにつけて、(蜻蛉・上・天曆八年)

それだけ「とあり」における「あり」の意味は、語義的に捉えやすく、「(発言が)ある。言う。」(『古語大辞典』)、「助詞」とを受けて発話をあらわすこともある。(『角川古語大辞典』)のごとく、辞典類にも語義の一つとして取り上げられていることが多い。

(1)の例の「あれど」についても、したがって、もし「……はあれど」などの形で「あり」が「おもしろくあり」の意で慣用されていると言えるのなら別だが、後述する類例に照らしても、そのようなことは言えない。「おもしろく(は)あれど」という(1)の解釈は、例(4)のように慣

用度の高さから導かれたものでもないのである。

例(1)の動詞「あり」の解釈が、例(2)(3)のように文脈に明示された語句との直接関係で決まるのではなく、例(4)のように共起する語との慣用度の高さによって決まるのでもないとするれば、「おもしろく(は)あれど」という注釈書の解釈には、果たしてどの程度の妥当性・的中性が認められるのであろうか。

詳しくは後述するが、このことは係助詞「は」と共起する例のみの問題ではない。他の「こそ」「しも」「だに」「さへ」などの助詞が共起する場合の「あり」を含めても、対比的な後句に続く複文の前句に位置する「あり」の表現性は、すべて対比的な複文の構造に依存するが、その場合の「あり」については、先の補助動詞に寄せて理解できた例(2)(3)(4)のそのように、特定の語義の代理性、言い換えれば、「あり」で代理されている語義の明確さは全体としてむしろ認めがたく、その意味の取り方は多かれ少なかれ揺れることを特徴としている。複文前句のそのような「あり」には、後句の事態を対比的に強調する手段として、具体的実質的な意味の限定・明示をむしろ回避し、その述語としての表現を臙化する表現性こそめだつのである。全体として特定語義の代理性が認めにくいのは、そのような手段性に起因するものであろう。

要するに、一口にその意味の理解が文脈に依存するといっても、その依存性には、不要な重複を避けた結果に過ぎない場合と、より意図的に意味の限定・明示を回避する臙化的な表現法の結果である場合とがあるということである。前者においては、特定語義の代理性が高く、したがって、解釈上意味の限定が容易であるが、後者においては、一般にその意味が不定的になりやすく、強いて限定しようとするれば、その限定のしかたはむしろ揺れざるを得ない場合が多いということである。対比的な複文の前句における問題の「あり」の用法は、その後者であって、前者と同列に見てはならないと考えるのである。

以下、そのような立論をめざして、問題の「あり」の用法に関わると見られる複文形式の類型を、「あり」の上(多くは直上)に位置する助詞と、複文を構成する接続形式とを指標として区別し、その類型の別に複文形式における「あり」の文脈依存的な表示性を検討していくことにする。

三、複文類型別「あり」の臙化用法

三の一、「……はあれど」型

まず、前掲の例(1)のように係助詞「は」が「あり」の上に位置する複文形式の場合から検討する。その形式を構成

する接続助詞には、「ど」または「ども」の用いられたもののしか認められない。そこで、他の複文形式と区別するため、係助詞「は」が「あり」の上に位置し、接続助詞「ど／ども」を接続形式とする複文形式を、「……はあれど」型と呼ぶことにしよう。

「……はあれど」型に属する「あり」の用法には、ほかにも次のような例がある。一部を除いて、多くは「は」が「あり」の直上に位置している。また、いずれも和歌ないしは歌謡の例であり、散文の例は見出せない。時代的には上代の例が中心になると言えそうである。以下、例(1)の場合同様、動詞「あり」を述語とする成分関係の主要部に傍線を付して示す。

(5) 赤玉の光はありと人は言へどへ比訶利播阿利登比鄒播
伊珮耐君が装し貴くありけり(日本書記・神代下・
歌謡六)

筑波嶺の新柔爾の衣はあれどへ伎奴波安礼杼君が御
衣しあやに着欲しも(万葉・十四・三三五〇・東歌)

故郷の飛鳥はあれどへ飛鳥者雖有あをによし奈良
の明日香を見らくし良しも(万葉・六・九九二)

妹とありし時はあれどもへ時者安礼杼毛別れては衣
手寒きものにそありける(万葉・十五・三五九一)

薬師は常のもあれどへ久須理師波都祢乃母阿礼等賓

客の今の薬師貴かりけり賞だしかりけり(仏足石歌・
一五)

大ひれや小ひれの山はや寄りてこそ寄りてこそ
山は良らなれや遠目はあれどへ止保女者安礼止

(東遊歌・八)

みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつな
でかなしも(古今・東哥)

「……はあれど」型に属する(1)および(5)の諸例の間には、
係助詞「は」および接続助詞「ど／ども」がそろって共起
していること以外にも、重要な共通点がある。接続された
後句の述語ないし述語相当と見なせるものが、いずれも形
容詞、もしくは形容詞的だという点である。例(5)の第一例
の「貴くありけり」、第二例の「着欲しも」、第三例の「良
しも」、第五例の「貴かりけり・賞だしかりけり」、第七例
の「かなしも」は、まさに形容詞を核とする述語であり、
第四例の「寒きものにそありける」も形容詞「寒し」を核
とする述語に相当しており、第六例の「良らなれ」も、形
容詞的な「良ら」を核とした述語である。前掲の例(1)の後
句「春の海辺にすみよしの浜」でも、地名の「すみよし」
を掛けてはいるが、形容詞「住み良し」こそが前句との対
比において述語になっている。

「……はあれど」型の複文形式では、このように後句の

述語ないし述語相当のものが、形容詞か形容詞的な語句かであり、「あり」を述語とする前句と、そのような後句との意味関係はいずれも対比的である。「あり」の上に位置する係助詞「は」も、そのような両句の対比にそなえたものと見うるから、その「あり」が担う意味は、主としてその後句の述語ないし述語相当の、形容詞や形容詞的な語句との対比に最も依存していると見てよからう。「……はあれど」型の複文形式における「あり」の用法は、その意味で、先述の例(2)(3)(4)の場合に比べて、後続文脈への依存性をこそ特徴としている。例(1)の「あり」の解釈が、(2)(3)の「あり」のように、文脈に明示された語句との直接関係でも決まらず、(4)の「あり」のように、共起する語との慣用によつても決まらないのは、主としてこの後続文脈への依存性と、後句の強調を目的とする手段性に起因することなのである。

例(1)および(5)の諸例における複文両句の意味関係を探れば、前句の「あり」が暗示する意味と、後句の述語ないし述語相当である形容詞などが意味する状態や評価との間には、いずれも普通と高度とと言えるような程度差において、両句の状態や評価が対比的であるという共通点が見出せよう。このような複文両句の意味関係については、かつて拙著『古代接続法の研究』⁽²⁾でも、次のように言及している。

このように一般と特殊を対比する場合の前句は、次のようにその述語が担うべき実質的意義を文脈(後句)に委ね、「……はあれど(も)」と形式的な述語だけをとつてあらわれることがある。

筑波嶺の新桑爾の衣はあれど(杵)君が御衣しあやに着欲しも(万葉・十四・三三五〇・東歌)

(以下、四例の引用例、中略)

これらの前句はその表層において実質的な意味を明示してはいないから、たとえば、「……はともかく」というような現代語の言い方に一派通じるところがある。一般と特殊の対比的表現であるから、前句の事態は本来後句と共通性をもちながら、価値的にはより一般的問題にならないものと見られているといえよう。次のように両句の現実的な意味が反対に取れそうな例もあるにはあるが、表層的にはこの前句も衣手の寒さにおいて問題にならないものと見られていると考えてよい。

妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものに
そありける(万葉・十五・三五九一・遣新羅使
人)

ここにいう「一般と特殊」は、程度差に関するそれである。そのことの明示を欠いた点では、今からすれば少し説

明不足を感じるが、「……はあれど」型の複文形式における対比が、肯否や正負などの意味で単に対立するもの同士のそれではないと考えた基本線には変更の必要を認めない。前句の述語として「あり」が担う意味と後句の述語の意味との関係も、したがって単に対義的なのではない。後句との対比が程度差についてのそれである以上、「あり」の担う状態の意味については、後句との関係において類義的に捉えることこそむしろ肝要であり、先に引用した大系本の頭注が紹介する「住みよからずあれど」の意とする、たんに対義的な解釈は、その点の誤解に基づくものと言える。

このような普通と高度という程度差の対比性に立脚すれば、例(1)の前句の「雁なきて菊の花さく秋はあれど」も、一般的な普通の状態・評価を担い、後句の「春の海辺にすみよしの浜」の住み良さこそ、取り立てて言うべき特殊な高度の状態であり、真に評価できるものとして対比されていると言えよう。例(1)の解釈の「おもしろく(は)あれど」という「おもしろく」も、後句において対比の焦点になっている「住みよし」を、取り立てて言うべき特殊で高度のありようとし、それと対比的に「住みよし」というほどではないが、それと類義的で、もつと一般的な普通の状態や評価を担える語という条件に一応叶っている。

ただし、例(1)の諸注のように、「おもしろく(は)」を

「あれど」に補い、「あり」を補助動詞に寄せて理解しようとする説明法については、そのほうが初心者にもわりやすからうという便宜を除けば、必ずしも必要とは言えない。なぜなら、「……はあれど」型の後句でこそ、述語ないし述語相当の語句が形容詞的なものに限られていたが、後述する他の型においては、後句の述語が形容詞的なものには限られない。複文前句におけるこの種の「あり」を補助動詞寄りに理解することは、類似の用法のすべてに適用できるわけではないのである。したがって、他の型における用法との共通性も重視すれば、この型の例(1)の場合も、後句の述語の形容詞的なものとの関係で「あり」の暗示する実質の意味が形容詞「おもしろし」に当たると見るなら、ここは「おもしろけれど」の意と、より端的にその該当する意義を指摘しても、それはそれで他の型の場合を含めた「あり」の意味の捉え方として、むしろ整合性が得られる。また、「住みよし」に対して類義性をもち、より一般的で普通の状態・評価を担える形容詞は、「おもしろし」に限られるかと言えば、決してそうは言えない。その形容詞は「よし」と捉えても、何も不都合は生じない。また、対比的焦点になる後句の語句に対して類義性をもち、より一般的な普通の状態・評価を担える語は、後句のそれが形容詞だからといって、直ちに形容詞に限られることにもなる

まい。個々の例の訳し方の適切度などは別に、この種の「あり」一般の意味の捉え方の可能性という観点から言えば、すでに引用したかつての言及のように「……はともかく」で言い換えて、「……秋の趣はともかく」でもよいし、不定詞「何」を用いて「……秋の趣もなんだが」と言葉を濁す訳をしても、十分その表現の理解は成り立つ。というより、「あり」の表現性を考慮すれば、その訳し方のほうがむしろ適切であろう。

要するに、「……はあれど」型の複文形式の「あり」は、普通と高度の程度差の対比において、後句の焦点となる状態・評価と類義性をもつ意味を、その文脈に依存して婉曲に漠然と暗示しているだけなのである。例(1)について見てきたように、特定の例一つの解釈の可能性をめぐっても、その類義の意味の範囲内に収まる「あり」の意味の捉え方は、非決定的不定的であり、揺れることをむしろ特徴としている。例(2)(3)(4)の「あり」に先述した語義的な捉えやすさとは、その点で対照的なのである。

しかし、「……はあれど」型の複文形式の「あり」にも、次のようにむしろ語義寄りに一般化しようとした解釈もある。これは前掲の(5)の第一例についての注である。

光はあり 赤玉の光は美しい、の意。アリは元来存在する意の動詞であるが、転じて存在を肯定・容認する

意にも用いられる(『古事記編』一一二頁「ありとなしの意味——言語における主観と客観——」参照)。

このアリも赤玉の光を肯定する意であり、したがって赤玉の光は美しい、結構だ、などと意識することができる。赤玉の光を肯定した上で、しかし君の装いはそれ以上に美しく貴いと、後者のほうに重点を置いた賞揚の形式である。(土橋寛『古代歌謡全注釈日本書紀編』)

ここに述べられた「存在を肯定・容認する意」という説明法も、(5)の第四例の「妹とありし時はあれども」のように、「は」で提示されるのが主語でない場合には、その「存在」の意味がわかりにくくなるが、そのことを除けば、「……はあれど」型の「あり」の用法にはほぼ通用すると一応は見うる。しかし、類似する「あり」の用法は「……はあれど」型以外の後述する型にも認められるが、この型以外の「あり」の同様な暗示的用法には触れられていないし、通用する説明法でもない。それに、拡大解釈をすれば、否定表現を除く表現は、「あり」に限らず、大方何かの肯定・容認に当たるとも言えなくはない。「存在を肯定・容認する意」という、語義めいた説明法には、何よりもそれが当てはまる文脈上の条件とそれに基づく射程がはっきり示されていない点が問題になるだろう。もし語義的に捉え

ようとする立場でその条件・射程を明らかにしようとするれば、むしろその立場自体を解消せざるを得なくなろうというのが筆者の見解なのである。

複文前句の「あり」の暗示的用法には、目的において後句に示される判断を際立てるための手段という性格が総じて認められる。「……はあれど」型の複文形式におけるそれも、前句の状態や評価自体を積極的に問題にするものではなく、その両句の対比には後句の状態や評価を強調するための手段という面が強い。他を際立てるためのそのような手段性から言えば、例(1)の場合も、もしその原文が類義的な形容詞「おもしろし」などで前句の状態・評価を明示してあれば、その対比は相対的により両にらみの表現になり、後句の状態や評価の高度性を強調する手段としての意味あいは、それだけ薄くなるだろう。

(5)の第一例には、たまたま次のようなその異伝の歌がある。この異伝の歌もその対比の構造において後句に重点が置かれているとはいえず、両句の述語とともに明示的な表現法である点から言えば、表現意図においてこの両句のほうがより対等の表現である。

(6)赤玉は緒さへ光れど白玉の君が装し貴くありけり(古

事記・上・歌謡七)

そう考えれば、後句との類義性の範囲内で不定的でもあ

る、「あり」の漠然とした暗示的用法は、後句の事態を際立たせるための手段として、前句の事柄はどちらかと言えば末梢的であり、問題外であることを併せて暗示しようとする表現態度の所産と見てよい。すでに述べたように、語義的に捉えにくく、揺れることを特徴とする、この種の「あり」の意味作用の特徴は、そのような表現態度のもとに、具体的実質的な意味の明示を避けてその述語としての表現を臙化している点にこそ見出せるのである。本稿では、そのような理解に立って、この種の複文形式の「あり」の用法を、臙化用法と呼ぶことにする。

三の二、「……しもあれ」型

「……はあれど」型における「あり」のそれに類する臙化用法は、助詞「しも」と共起する複文の前句にも認められる。「しも」と共起するそれには、古い已然形による接続法が維持されたものらしく、接続助詞は現れないが、動詞已然形が前句の述語性ととともに、後句との接続の役目も担って複文を構成するので、これも複文前句の「あり」に認められる用法という点では「……はあれど」型のそれと共通すると言えよう。助詞「しも」と共起する複文形式は、「……しもあれ」型と呼ぶことにする。助詞「しも」自体の用例は上代からあるが、この型における「あり」の用法

は中古以降にしか認められない。

なお、助詞の下位分類において、通説では「しも」は副助詞と見られるが、「あり」の已然形と共起する「しも」は、その接続形式が係助詞「こそ」と共起する後述の「……こそあれ」型に通じる点からも、間投助詞とも係助詞とも言われる「し」と一体化した語として係助詞と見るべきであろう。

「……しもあれ」型の複文形式における前句の「あり」は、いずれも後句の特定の事態に対して、その要因に該当しうる対象や時空などがほかにも多数あることを暗示し、その不特定多数の存在と、その中のただ一つによりいわば偶然に現実化した事態との対比によって、後句の現実のあいにくさ、珍しさなどを、否定的にも肯定的にも評価することを基本とするものである。次にその一斑を示す。

(7) 時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋しきものを (古今・哀傷)

・折しもあれ、対面に聞ゆべきほどにもあらざりければ、(蜻蛉・中・安和二年)

・「清らの人あり」とて、奥まりたるをんななどもなど、打ち解け姿にて出でて見るに、時しもあれ、この風の、簾を外へ吹き、内へ吹き、まどはせば、簾を頼みたる者ども、我か人かにて、押さへ控へ騒ぐまに、(蜻

蛉・下・天延二年)

・手はいとさだ過ぎたれど、よしならず「森の下草老いぬれば」など書きすぎびたるを、ことしもあれ、うたての心ばへや、と笑まれながら、(源氏・紅葉賀)

この型における「あり」は、たとえば、第一例が「他に時もあるのに」(日本古典文学大系本・頭注)と言い換えられているように、「他に」という語を補う解釈が一般に採用されている。しかし、それ以外に解釈のしようがないわけではない。「時は多いのに」とか「時は今に限らないのに」などと言い換えても、十分理解できるのである。この型の場合、「あり」の意味の解釈にはその他の型の場合に比べて、相対的に揺れが少ないとはいえるが、同じ対比的な複文構造に依存する点から見ても、後句を強調する手段としての臙化性は認めてよからう。

この型の場合は、要因として該当しうる不特定多数の一つだけが偶然に的中して現実となった後句の事態への抵抗感を強調するため、該当しうる不特定多数の存在を臙化する表現性を「あり」に認めることができる。この型における対比の焦点は、不特定多数と現実の一事態との量的な対比と見るにせよ、可能性の不特定さと特定された現実との質的な対比と見るにせよ、両句の関係はきわめて対義的である。

このように複文前句に「しも」が共起し、「あり」の已然形による接続法で構成されている例には、次のようにその「しも」の下にさらに「こそ」が付いた例もある。

(8) 忍びて清水に詣でつ。折しもこそあれ、三位中将殿の

北の方、男君も詣で給ふに、(落窪・二)

・この時のところに、子産むべきほどになりて、……いと聞きにくきまでのしりて、この門の前よりしもわたるものか。われはわれにもあらず物だに言はねば、見る人、使ふよりはじめて、「いと胸痛きわざかな、世に道しもこそはあれ」など言ひのしるを聞くに、

(蜻蛉・上・天徳元年)

・よひのほどに、まゐりたり。時しもこそあれ、あなたに人の声すれば、「そゝ」などのたまふに、(蜻蛉・上・安和元年)

・これもかれも、「一夜聞きき」「この暁にも鳴きつる」といふを、人しもこそあれ、われしもまだしといはむも、いと恥しければ、(蜻蛉・下・天禄三年)

・ことしもこそあれ、うたて、あやし、と思せば、物もの給はず。(源氏・総角)

前句に「こそ」の共起する複文としては、後に「……こそあれ」型と呼ぶものもあつて、別に取り上げなくてはならないが、(8)の諸例のように「……しもこそあれ」の形に

なっている例は、両句の意味関係において、「……しもあれ」型の(7)の諸例と共通し、後述する「……こそあれ」型一般に認められる意味関係とは、その広がりから言えば、むしろずれがある。その意味で、これらの「……しもこそあれ」を前句とする複文も、「……しもあれ」型の一種と見てよいだろう。「……しもあれ」と「……しもこそあれ」とでは、例の多さにも出現時期にも、大差は認めにくい。構文上は「……しもあれ」が先行したとも限らないが、今のところその点を見極める用意は乏しい。

「……こそあれ」型の複文形式については後述するが、まさにその型の中にも、次のように意味関係の特徴からは「……しもあれ」型のそれと共通するものがある。ただし、今のところ気付いたのは次の一例のみである。例が限られているようであるから、便宜この場所を借りて触れよう。この対比的表現は、ただ一つ「禰」のみが「神の御前のもと生ひはじめ」たことを、珍しいことと評価している。

(9) 禰、臨時の祭りの御神楽のをりなど、いとをかし。世

に木どもこそあれ、神の御前のもと生ひはじめけむも、とりわきてをかし。(三巻本枕・花の木ならぬは)

ところで、「……しもこそあれ」を前句とする(8)の諸例の複文や、両句の意味関係がそれと共通する例(9)のような「……こそあれ」型の複文に対しては、その「あり」の位

置に、副詞「さはに」や、形容詞「多し」などを用いて、その意味を隴化せずに明示化したとき例も、次のように少なくない。上代や中世の例には、接続形式に接続助詞を用いた例もあるが、併せて示そう。共起する助詞が「しも」の例を(10)、「しもこそ」の例を(11)、「こそ」の例を(12)とする。

(10) やすみしし我が大君の 聞こしをす天の下に 国はし

もさはにあれども 国者思毛沢二雖有 山川の清

き河内と 御心を吉野の国の 花散らふ秋津の野辺に

宮柱太しきませば (万葉・一・三六)

・時はしもいつもあらむを へ時者霜何時毛将有乎 心痛

痛くい行く我妹か若子を置きて (万葉・三・四六七)

(11) そのかへる年の十月二十五日、大嘗会の御禊とのし

るに、初瀬の精進はじめて、その日京を出づるに、

……「あれは物語で人なめりな。月日しもこそよにお

ほかれ」と笑ふ中に、(更級日記)

・時しもこそおほけれ、今夜しもわれく判官殿に宿を

かし参らせて候は、如何せんずる。(義経記・七)

・船中の人々に、ひとしもこそおほきに、門脇殿は御覧

じて、「母衣懸け武者の船招くは、左馬の頭行盛か、

無官の太夫敦盛か。あれを見よ」との御諠なり。(幸

若・敦盛)

(12) 世に人こそおほかれ、かかるおもしろの駒を引寄せ給
ひしぞ。(落窪・二)

・「抑イカナル御事ニテ、都二人コソ多キニ、角ク親成

リマイラセヌラン。有難キ互ノ契カナ」トイフ程ニ

(沙石集・二)

・月日こそおほけれ、今日は十七日、この御縁日ぞかし。

(義経記・五)

・所こそおほきに、わが所領のうちに生れあふこと、前

世の宿縁なり。地をつくりて過ぎよと有ければ、

(伽・文正さうし)

これらの例の時代的な分布を、例(7)(8)(9)のそれと比較すれば、例(10)は上代のもので、例(7)の「……しもあれ」型の複文形式の例よりも古い。二例とも、係助詞「しも」の前に係助詞「は」が来ている点も、ここに言う「……しもあれ」型の複文形式には見られない特徴であるが、これらの類義表現の「しも」が、係助詞「は」に下接している承接のしかたは、すでに触れた「しも」の係助詞性の有力な傍証にもなるものである。中古以後の「……しもあれ」型による表現と意味上類似する、より明示的な表現の例が、このように先行して上代からすでに認められることは、「……しもあれ」型の時代性を考える上でも注意する必要があるだろう。

例(1)は「しもこそ」が、(12)はその代わりに「こそ」が共起する例であるが、(12)の落窪物語の例以外は、(7)(8)(9)のそれよりも時代的に新しいものである。「……しもあれ」型における「あり」の體化用法が、中世に向けて衰退していくことと、(11)(12)の例が中世を中心に多くなることは、表裏の關係にあることのように思われる。

ところで、「……しもあれ」型の復文形式には、時を限定する表現などにおいて、本来その後句の事態が担っていた、ほかならぬその時に、とか、よりによって……が、などといった被限定感をその形式自体に取り込んだかのように、ちやうどその時とか、まさにそれが、などの意にも、比較的早くから転用されることがあつたようである。そのような転義は、古代語ではたんに「しも」を添えるだけの言い方とむしろ類義性が高まる。「しもあれ」は「しまれ」という縮約形で現れることもあるが、次のように比較的早い例にはなぜかそれがめだつ。

(13) 御宮づかへのほどなどには、さうやくをだにとこそおもひ給ふる時しまれ、いたづら人になりぬること、
なくくきこゆ。(宇津保・あて宮)

うへのをのこども前裁ほりにのべにまかりいでたりけるにつかはしける 橘則長
をみなへしおほかるのべにけふしまれうしろめたくも

思ひやるかな(後拾遺・秋上)

・ むかしみける人、かものまつりのしだいしにいで
たちでなんまかりわたるといひて侍りければ(馬
内侍)

きみしまれみちのゆききをさだむらんすぎにし人をか
つわすれつつ(新古今・恋五)

右の第二・三例に共起する「けふ」「きみ」などの語は、不特定多数のありようを許さないから、「……しもあれ」型本来の表現には認められない。あるいは第一例のような転義をもとに、和歌では音数の制約から、「しもあれ」の約「しまれ」が「しも」相当の歌語として使えるというような歌語意識でも生じていたのであろうか。

中世以降の「時しもあれ」は、次に示すように、まさにその時というほどの転義で、もっぱらある事態と時間的に重なるごとく他の事態が出現するさまを表す言い方になつたように見える。

(14) 来し方を思ひ続けて、いと哀なるときしも有れ、名も
昵じき鳥の音も、栖田河原の渡守に、事問ひ侘びし旅
の空(宴曲・四・伊勢物語)

・ 女義を同道なされては寺中の思はくいかゞなりと。す
かしなだむる時しもあれ。武蔵坊弁慶息を切つて馳着。
(浄・義経千本桜・二)

例(13)(14)のような転義への変化は、「……しもあれ」型の「あり」の隲化用法全体の比較的早い衰退傾向にも助けられたものであろう。

三の三、「……こそあれ」型

次に、係助詞「こそ」と共起する複文形式を「……こそあれ」型と呼ぶことにして、その型における「あり」の隲化用法を検討する。この型の場合も、複文両句の接続には古い已然形による接続法が用いられて、接続助詞は現れない。

「……こそあれ」型の複文形式における前句の「あり」は「ありけれ」「あらめ」「あめれ」などと、助動詞を伴って用いられていることも多い。それだけその両句に対比される事態は時制的にもムード的にも多様である。それらの形の例も併せて、次にその一斑を示そう。

(15) 今こそあれ我もむかしはおとこ山さかゆく時もあり
しものを(古今・雑上)

・この母の女のさがなものの、宵まどひして寝にけるとき
こそありけれ、夜ふけければ、目さまして起き上がり
て、(平中物語)

・舞の師ども、かたちよくわかき人こそあめれ、をいに
たる人などは、かゝる御急ぎをまづとし給て、まだ衣

もたばざりければ、(宇津保・嵯峨院)

・人よりさきに見たてまつりそめてしかば、あはれにや
むごとなく思ひきこめる心をも知りたまはぬほどこそ
あらめ、つひには思しなほされなむと、(源氏・紅葉
賀)

・さいへど、とのゝ年頃の人こそあれ、この頃参り
よりつる人くは、やがて出でゝいき果てにけり。

(栄花・みはてぬゆめ)

・ことの様体は、三条院のおはしましけるかぎりこそあ
れ、うせさせ給にけるのちは、世の常の東宮のやうに
もなく、(大鏡・師尹伝)

・一旦こそあれ、さのみ言ふ人もなれば、御所はあなた
に渡らせ給に、(とはすがたり・二)

・此比こそあれ、其昔は武家権を執て、四海九州の内尺
地も不残ければ、(二元和整版本太平記・三五)

・女房の身こそあれ、男の守刀をかけたためしは、い
かにと仰せければ、(伽・和泉式部)

「……こそあれ」型の複文形式にも、例(9)のように
に見た通りであるが、「……こそあれ」型の複文形式に
おける両句の対比的な意味関係は、この(15)の諸例に見るよ
うにはるかに多様である。つまり、この型の複文形式こそ、

時間空間的にも数量的にも、肯否・正負などに関しても、さまざまな意味での対比に適用できる形式であった。したがって、前句の「あり」が臚化する意味は、後句の述語とは対義的であることを特徴としている。

たとえば、(5)の第一例では、「あり」で暗示された「今」のわが状態と、「おとこ山さかゆく時もありこし」という「むかし」のわが状態とが対比されている。「あり」で臚化している「今」のわが状態は、「おとこ山さかゆく時もありこし」の「おとこ山」に掛けた「おとこ（歴史的仮名遣いでは「をとこ）」本来の若さに恵まれた状態や、「さかゆく（坂行く）」に掛けた、栄え行く上り坂の状態を対比の焦点として、それと対義的に対立する状態と解される。しかし、その条件の範囲内での意味の取り方は、ここでもやはり揺れる。宣長は、「今コソ此ヤウ二年モヨツテピンボウラスレ」（古今集遠鏡）と明示化した訳をしているが、もつと暗示的には「今はともかく」といっても「今はなんだが」といっても、一応意味は通じるのである。

第一例で対比されている意味は、状態的であったが、むしろ動作的な意味が対比されている場合もある。たとえば、(5)の第四例は、源氏の葵の上に関する思いを述べた箇所であるが、後句の「つひには思しなほされなむ」という、葵の上の変化への期待を強調するため、対比的に「……心を

も知りたまはぬほど」の彼女の思いや態度が「あり」によって臚化されている。「あり」の意味は、その「思しなほされなむ」と対義的に理解しなくてはならない。第五例でも、「この頃参りよりつる人々」の行動を強調するため、対比的に「年頃の人々」の行動が「あり」によって臚化されている。このように「……こそあれ」型における「あり」が臚化する意味は動作的なものにも広く及ぶのである。この型の複文形式には、次に示すような「ばこそ」の形で「こそ」が接続助詞「ば」による順接の条件を提示し、「あり」はその帰結を暗示して例も多い。これらは、「……こそあれ」型の前句自体が条件関係の複文になっているのである。

(16) 「……今は泣きのゝしるとも、事のきよまはらばこそあらめ」との給へば、（落窪・二）

・「いざたまへ、まろがまかる所へ。こゝとてもまろならぬ人の見えばこそあらめ、かくいでゝまかりありくほど、つれぐとまち給ほど、くるしうおはしますらん。……」（宇津保・俊隆）

・頭中将の、すずろなるそら言を聞きていみじう言ひおとし、……と聞くにもはづかしけれど、「まことならばこそあらめ、おのづから聞きなほし給ひてむ」と笑ひてあるに（三巻本枕・頭中将の、すずろなるそら言

(を)

(17) ひきものは、北の方さる上ずにおはすれど、ことのないかりしかばこそあれ、箏・和琴などならはし給。(宇津保・俊蔭)

例(16)の三つの例において「こそ」に上接するのは仮定条件であり、例(17)のそれは確定条件であるが、どちらの場合もその条件帰結関係の緊密さによって、後句として本来対比されるはずの別の因果関係をいわば前句のみでも十分暗示できる性格をもつ。そのため、このように「ばこそ」の形で条件を承けた例では、本来の意味の論理的な後句は十分には表層に現れないことがむしろ多い。そのうちでも、例(16)のような仮定条件の「こそ」による卓示強調は、前句の帰結が「あらめ」の形で推量の助動詞「む」を伴い、反実的、非現実的な事態に慣用される結果、対比的にその条件とは対立する逆の現実を暗示する働きも強いと言えよう。しかし、そのような強い暗示性は、「こそ」の上接語句が条件句の場合のみかと言えば、実はそうではない。たとえば前句の述語が次のように「あらめ」と推量の助動詞を伴う例にも、対立する事態の強い暗示性とそれに伴う論理的な飛躍の認められる例がめだつ。

(18) 継母こそあらめ、中納言さへにくゝいひつるかな。

(落窪・一)

・姉君も聞き給ひて、我身こそあらめ、いかで此きみまでに人々しくもてなし聞えむと思へるを、(堤中納言・思はぬ方にとまりする少将)

・今生でこそあらめ、後生でだにあくどうへおもむかざる事のかなしきよと、(覺一本平家・一・祇王)

(18)の第一例は少将道頼の心中の思いであるが、この例には次のような解釈がある。

継母はにくくもいおうが、(そういうべきでない)中納言までにくく言つたことよ。(頭注)「継母こそにくくいひてあらめ、中納言はにくくいひざるべきを、中納言さへにくくいひつるかな」の意。(補注)(松尾聰校注・日本古典文学大系『落窪物語』)

この解釈が指摘する論理の飛躍は確かに認められよう。このような例も含めて言える、「……こそあれ」型の両句における論理の飛躍傾向も、係助詞「こそ」で上接語句を強く卓示強調することによる、対立的事態の暗示力の結果であり、そのように上接語句を強く卓示強調する情意が、論理関係の飛躍につながりやすいのである。

「……こそあれ」型の例は中世にも及ぶが、中世以降には次に示す「程こそありけれ」のように、本来の意味から転じていると見てよい例もある。

(19) 白山の神興既に比叡山東坂本につかせ給ふと云ほどこ

そありけれ、北国の方より雷飢う鳴て、都をさしてなりのぼる。(覺一本平家・一・俊寛沙汰鶴川軍)

・「其儀ならば、ゆきむかツてうばひとゞめ奉れ」といふ程こそありけれ、雲霞の如く発向す。(覺一本平家・二・一行阿闍梨之沙汰)

これらの例は文脈から判断して、上の連体語になつてゐる動作に対し、後句の事態が即時的に継起するさまを表すように見える。この種の言い方には、たとえば次のようにその形式がちよどその折に展開する他の事態を導く例もあつて、その転義の過程を想定する参考になるだろう。

(20) やゝ春ふかく霞わたりにて、花もやうくけしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散り過ぬ。(徒然草・十九)

このような例からこの言い方が二つの事態の時間的な重なりを意味するようになれば、上の連体語が瞬間的な動作を表す場合、その後句への展開の即時性へと意味をずらせるのは容易だからである。

次の「折こそあれ」も、本来の意味から転じているが、これはすでに述べた例(13)の「時しまれ」や(14)の「時しもあれ」と同様、まさにその時というほどの意で、もつぱらある事態と時間的に重なるように他の事態が出現するさまを表す例である。継起的ではあるが、例(19)のように即時継起

的なさまとは異なるだろう。

(21) 直にお目にかからんと、立上る折こそあれ。當番の役人罷出。大星由良の助様御子息。大星力彌様御出なりと申上る。(浄・仮名手本忠臣蔵・二)

三の四、「……だにあるを」型

「あり」の臚化用法は、副助詞「だに」と共起する複文形式にも認められる。その複文を構成する接続形式には、接続助詞のほか、連用形の中止法によるものもある。「だに」と共起する接続助詞には、古代語ではおもに「を／も」が用いられ、中世以降は接続助詞「に」よるのが普通になる。しかし、副助詞「だに」と共起する複文形式の特徴を捉える上では、それらの接続形式の差は無視しても特に差し支えないと思う。その意味で、ここではかなり便宜的ながら、古代語にめだつ接続助詞「を」にそれらの接続形式を代表させ、副助詞「だに」と共起する複文形式は、「……だにあるを」型と呼ぶことにしよう。副助詞「だに」の用例は上代からあるが、この型における「あり」の臚化用法が認められるのは、中古以降である。

副助詞「だに」の用法には、類推の用法と限定の用法とが一般に区別される。「……だにあるを」型の複文形式における「だに」の用法は、類推のそれであり、より程度の

軽い事態をあげて、より重い事態を類推させるものである。

中古における「……だにあるを」型の複文形式では、接統助詞に「を／ものを」を用いた例が多いが、これはより軽い事態から重い事態を類推させる志向性⁶⁾の意味関係が、古代語では接統助詞「を／ものを」の最も得意とする意味関係であったことによる。接統助詞に「を／ものを」を用いた例の一斑を次に示す。副助詞「だに」は「も」を伴って「だにも」の形で現れることもあるので、その例も併せて示そう。

(22) 雪とのみふるだにあるを梅の花いかにちれとか風のふ

くらん (古今・春下)

・こむといひてわかるゝだにもあるものをしられぬけさ
のまして侘しさ (後撰・離別)

・恨みわびほさぬ袖だにあるものを恋にくちなん名こそ
をしけれ (後拾遺・恋四)

・わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、(子ハ)

この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり。(源
氏・若紫)

第一例は梅の花の「雪とのみふる」ことを、「だに」によつて相対的には程度の軽い事態としながら、それを惜しむ気持ちに「あり」で臙化し、それを根拠とし、手段ともして、さらに散り急がす風の心無さを責める表現により、

風に散らされる花への愛惜の重さを類推させていると見てよからう。この「あり」の暗示する意味は、その類推の論理に沿つて考えれば、風の散り急がす花へのより重い愛惜の情とこそ対応するはずである。

しかし、その意味で後句にふさしいはずの、より重い愛惜の情そのものは明示されないまま、事実上の後句は、「いかに散れとか風のふくらん」と、風の無情を責める表現になつてゐる。この風の無情に対する非難は、「だに」の類推の論理から言えば、より重い愛惜の次の来るべきものと見てよいから、この複文形式における事実上の両句には飛躍があると言えよう。ただし、「だに」によつて前句の程度の相対的な軽さを強調し、そこから後句の事態の重さを類推させるのも、目的論的にはその重さを強く訴えるためである。副助詞「だに」の類推用法による使用には、目的論的にそういう情意的な主張性が強く、そのために前句に「だに」を置く複文には、むしろその情意のほうに即して、類推の論理から言えば、この種の飛躍のあることが一般にも多い。

第二例も、「こむといひてわかるゝ」時を相対的に軽い事態として、その折の思いを「あり」で臙化し、そこから「しられぬけさ」の「侘しさ」の程度の重さを類推させてゐる。この後句は、類推の論理から見ても、まさに後句に

ふさわしいものである。前句の「あり」が臚化している意味は、何よりもこのような後句の述語に依存するが、それもやはり後句の述語と状態的評価的に類義性を保てる範囲で揺れると見てよからう。この例の場合、「侘しき」を後句の述語相当語として、その焦点を形容詞「侘し」と解すれば、「あり」で臚化している意味も、「侘し」でもよいが、また「悲し」でも「つらし」でも、さらには不定詞「何」を用いて、「また来るよといつて別れていく朝の別れでさえなんだのに」と言葉を濁した訳をしても差し支えあるまい。なお、第二例の後句中の副詞「まして」は、その状態の前句に対する相対的な程度差を強調するものとして、複文の前句に類推用法の「だに」があれば、その後句には共に起することの多い副詞である。

第二例のように類推の論理に即した後句が続く場合には、その実質的な状態を表す語がおのずから後句に現れよう。その意味では「あり」で臚化する意味も、後続文脈に依存すると言えるが、第一例のようにそれが情意に沿って飛躍的に展開されると、「あり」で臚化している意味も、事実上その文脈外の脈絡にも依存せざるを得なくなる。それだけ「あり」の用法は臚化の度を高めるのである。

第三例は第二例と同様であるが、第四例は良清が語る明石入道のことば（遺言の一節）で、「わが身のかくいたづ

らに沈める」ことを相対的には軽い事態として、その無念さを「あり」で臚化し、それを根拠とし手段ともして「この人ひとり」への期待が叶わなかった場合の無念さをより程度の重い事態として類推させている。しかし、ここでもそのより重い無念さそのものは明示されず、「この人ひとり」への期待が格別であることへと、類推の論理からは飛躍した展開になっている。その点で、これも後句への展開のしかたについては第一例の同類である。

「……だにあるを」型の複文形式で、接続助詞に「に」を用いた例には、次のようなものがある。中古にも例はあるが、中世以降は、接続助詞「に」によるのが一般的になっている。

(2) いみじうめでたきを、よそ人に聞き見むだにあるに、えせきあへ給はず。(宇津保・俊蔭)

・ 一事のすぐるだにあるに、かくいづれの道も抜け出で給けんは、いにしへもはべらぬ事なり。(大鏡・師尹伝)

・ まさしる太上法皇の王子をうちたてまつるだにあるに、凡人にさへなしたてまつるぞあさましき。(寛一本平家・四・通乗之沙汰)

・ 金城湯池ト云ハ金ハ城ノ堅ニ云ゾ。湯ハ、水ダニモアラウズニ、ケツクニヘタル湯ナラバナニガ人ハヨラレ

ウゾ（史記抄・秦始皇本紀・四3ウ）

第四例は、前句の「あり」に助動詞「うず」が付いて推量表現になっている点で、「……だにあるを」型の複文形式には珍しい。堀には水があつても城に近づきがたかろうと、「水」の場合の近づきがたさを相対的に軽いものとして、「あり」で臚化し、それを根拠・手段に、煮えた湯ならもつと近寄りがたいはずだということを類推させている。「……だにあるを」型の接続形式には、連用形の中止法によるものもある。次にその例を示す。

(24)世の中に多かる古物語の端などを見れば、世に多かるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上までかき日記して、めづらしきさまにもありなむ。(蜻蛉・上・序)

・それに恥づかしう、なまめかしき顔姿にぞ物し給へる。かたはらよりみるだにあり、向ひゐてあらんは。(宇津保・楼の上上)

この第一例は「世に多かるそらごと」を相対的に軽いものとして、それに対する思いを「あり」で臚化し、それを根拠・手段に後句の「人にもあらぬ身の上までかき日記した場合の読者の思いを、「めづらしきさまにもありなむ」と、その程度の重さを類推させている。「あり」で臚化した意味の範囲は、主としてその「めづらしきさま」と類義性を保てる範囲に限られよう。その意味で解釈の方向

については次の指摘に従つてよいだろう。

「だにあり」は慣用句で、下文「めづらしきさま」と関連し、「だに（メヅラシキサマニ）あり」の意とする石田穰二氏説（『解釈と鑑賞』昭和三十七年十一月）が正しい。〈語釈〉ありふれた作りごとでさえ、ついでいけないのに、〈訳〉（柿本燮『蜻蛉日記全注釈』）

「……だにあるを」型の複文形式は、見てきたように「だに」の類推用法によつて前句の述語の状態を相対的に程度の軽いものとして、「あり」で臚化し、それを根拠・手段に後句の状態の重さを類推させる意味関係を基本とする。その関係における程度の軽重の対比性は、類推の働きを別にすれば、「……はあれど」型の程度差とも一脈通じる点がある。したがつて、「あり」で臚化される意味は、この型の複文形式においても、主として後句の述語に依存し、その状態や評価と類義性を保てる範囲で理解されることになる。

しかし、副助詞「だに」の使用には、目的論的に後句の程度の重さを強く訴えるという、情意的な主張性が強く、後句はむしろその情意に即して展開しがちであり、類推の論理から言えば、飛躍的であることも多い。「……だにあるを」型の複文形式に、文脈に依存しがちの接続助詞「に」や連用形中止法は用いられても、論理性にすぐれる

接続助詞「ど／ども」の共起した例がないのも、そのような強い情意と「ど／ども」とはなじみにくいためであろう。「……はあれど」型の複文形式に適用できた「ともかく」という訳語は、この型の訳には合わないが、それも類推を働きかける強い志向が、適合しないためのものである。この型の複文形式に比べれば、普通と高度の程度差を対比する「……はあれど」型の論理関係は、はるかに明確であったと言えよう。

三の五、「……さへあるに」型

副助詞の世界では、中世以降を中心に、「だに」に「さへ」が交替していく意義・用法の通時的变化がある。すでに述べた「……だにあるを」型の副助詞「だに」の位置にも、その推移を反映して、「さへ」が現れることも次第に多くなっていった。そのようにして現れた副助詞「さへ」が、主として接続助詞「に」と共起する複文形式を、「……さへあるに」型と呼ぶことにしよう。「……さへあるに」型における「あり」の臚化用法は「……だにあるを」型のその後身に他ならない。

「……さへあるに」型には、室町時代から次のような例がある。

(25) 見ぬさへあるに、さて見てはの (宗安小歌集・二一)

二)

・今夜是へ参たを命を助て被下るゝさへ有に、何とは
(「太刀」が申請らるゝ物で御ざるぞ。(虎寛本狂言・連歌盗人)

・敷居の内へ泥躰を切込さへ有に。此刀で誰を切。

(浄・義経千本桜・二一)

・今までさんざ人の感情を弄んで置きながら、今と成て

……本田なぞに見返へるさへ有るに、人が穩かに出れば付上つて、(二葉亭四迷・浮雲・二・一一)

「……さへあるに」型の複文形式も、相対的な程度の軽重の対比によって、前句の事態からより重い事態を類推させる意味関係を基本とすること、したがって、「あり」で臚化される意味が基本的に後句の述語に依存してそれと類義的であること、しかし、その情意的な主張性の強さから、後句への展開は飛躍しがちであることなど、その前身である「……だにあるを」型の場合と特に変わりはない。ただ異なるのは、その例が中世以降に偏るといふ時代的な分布のしかたのみである。

四、衰退理由と近代語の類義表現

「……はあれど」型は、その例が和歌にしかなかった点でも、その勢力は最も限られ、中古のうちに衰退したよう

に見えた。「……しもあれ」型と「……こそあれ」型は、中世にもその例はあるが、それらも「……しもあれ」型、「……こそあれ」型の順に、次第に文語化し、やがて姿を消すことになった。「……だにあるを」型も、使用されたのは中世ごろまでであるが、これは単に姿を消すというより、中世を過渡期としてその後身の「……さへあるに」型に道を譲ったと言えよう。そうして譲られた「……さへあるに」型だけが近代語までかろうじて命脈を保ったのである。したがって、複文前句における「あり」の臚化用法を全体として通時的に見れば、それは古代語を中心に認められる現象であり、中世語を過渡期として近代語における衰退はかなり著しいと言つてよい。

問題の「あり」の臚化用法は、このように通時的には古代語を中心に認められると総括できるが、だとすれば、「あり」の臚化用法が古代語においてこそ盛んであったのはなぜか、その理由や背景も、併せて考えられてよい問題になる。そこで、次にその点についての見通しを少し述べよう。

「あり」の臚化用法が古代語を中心に盛んであった、その理由ないし背景は、動詞「あり」の用法自体についてのそれと、もう一つ、前句において主語を中心とする連用文節を提示し、その「あり」の用法を助けたであろう、「は」

「こそ」「しも」「だに」「さへ」という助詞の振る舞いについてのそれとに、一応分けて考えることができよう。

古代語の動詞「あり」には、それに近接するかたちで、補助動詞の「あり」や、最初に触れた補助動詞寄りの代理的な「あり」の用法もあり、古代語ではそれらが互いに連携することも容易であつた。そのうえ、古代語の助動詞・接続詞などには、「あり」や「あり」を語源的に含む形「(けり)」「たり」「なり」「めり」「されば」「されど」などが多く、「あり」の助けを借りる形容詞の補助活用のように、近代語まであまり変わらずに継承される現象もそれと併せて、古代語の文法には「あり」を中核とするような構文体制がきわめて顕著であつた。しかし、近代語では、補助動詞でも古代語の「あり」の一部は「いる」と交代するとか、接続詞にはむしろサ変動詞「する」を含む形「(そうして)」「すると」などが代わつて台頭してくるなど、全体にそのような特徴は分散し希薄化する方向にある。問題の「あり」の臚化用法が、古代語を中心に盛んでありえた理由、ないし、事情の一つは、そのような点に求めることができよう。

もう一つの観点、すなわち、前句において主語を中心とする連用文節を提示し、述語としての「あり」の臚化用法を助けたと見うる、「は」「こそ」「しも」「だに」「さへ」

という助詞の振る舞いについては、次のようなことが考えられる。それらの助詞のうち、「は」「こそ」は係助詞であり、「しも」「だに」「さへ」は通説によれば副助詞であるが、「……しもあれ」型の「しも」は、先にも触れたように係助詞と見るべきであろう。とすれば、「あり」の臚化用法を導くそれらの助詞の多くは係助詞であるから、この現象も古代語の係り結び体制と呼ぶことにした、構文規則のありようの一環と見てよさそうである。「あり」の臚化用法には、助詞の低位分類に寄せて言えば、係助詞に導かれる複文形式と副助詞に導かれる複文形式とがあることになるが、係助詞に導かれる形式がより古く、より多いことも、係り結び体制との連関性を思わせる。また、それらはいずれも中世を境に姿を消すが、そのことも、おそらく中世における係り結び体制の衰退と連動しているであろう。それに対し、ただ一つ近代語まで継承される複文形式は、副助詞「だに」の後身の「さへ」であつた。そのように副助詞に導かれる形式だけが近代語まで維持できたのも、「あり」の臚化用法が係り結び体制との連関において開拓されたものだったと見れば、副助詞に導かれる形式は本来より周辺のなありようであつたことになり、あながち偶然ではないとも言えそうである。

しかし、「あり」の臚化用法が衰退したとはいへ、複文

前句の述語を、後句の強調手段として臚化する表現法自体は、近代語にも姿を変えて継承されている点がある。対比的な構造のめだつ「……こそあれ」型の後身としては、複文前句の「あり」の代わりに、連語「知らず」「いざ知らず」、「ともあれ」、副詞「ともかく（も）」、不定代名詞「何」を核とする「何だけれども」などを用いて、いわばことばを濁しながら、後句の肝心な言及の説得力を高めようとする言い方が、新たに形成されている。それらによる述語の上接成分に共起する助詞、ないし助詞的な語には、「は」「なら」「たら」「から」など、総じて提示的条件的な意を表す語が共起する傾向がある。

まず、複文前句の述語に連語「知らず」「いざ知らず」を共起させた例は、次にその一斑を示すように江戸時代からある。これらは、その「ず」の連用形の中止法が接続形式になっていると見うるものである。

(26) 殿達こそ女郎を目利きして、「たれを呼ば」「かれを話そ」といわんすれ、女郎のかたから、指し合ひはしらず、殿達を選ぶ事はならぬ事でございます。(仮・難波鉦・一)

・此中には奇々妙々といふ品があるが、それともそなたが、わしがいふ事さへ聞ならば、この箱のうちはいざしらず、まだどのよふなちんぶつでもみせるころ、

サア返答はなんとく。(伎・与話情浮名横櫛・序幕)

・ほかの女ならいざ知らず、少なくとも、日本人の美しさ、精神的ばかりでなく、肉体的にも特殊な美しさを認めてゐるあたしには、まるで縁の遠いことですわ。

(岸田国士・古い玩具)

連語「ともあれ」や、副詞「ともかく(も)」を前句の述語とする複文の例も、江戸時代からある。ただし、次に示すように、江戸時代の例は「は」と共起する例が多く、明治以後には、「なら」「たら」などの条件形式と共起する例が多くなっているようである。

(27) まあ、それはともあれ、こふ久しく来るといふも縁だろふと思つて、(酒・傾城買二筋道)

・大まい百両といふ金故、ひよつと間違ひでもある時は己これは兎もあれ、奥に居る昨夜助けた木屋の若い衆、家へ帰すこともならずどうしたらよからうか、(伎・三人吉三廓初買・三幕目)

(28) イエく、着物は兎も角も、此櫛斗くしぼかりは、夫それにちがひはござんせぬ。(伎・東海道四谷怪談・四幕目)

・たとへ内証は兎も角も、大町小見世だいてうこみせの若旦那、所がらとて何事も、花美はまでに暮せし其人そのひとが、三疊敷を玉のここ、(人・春色梅児誉美・初・一)

・なまじお辰と婚姻を勧めなかつたら兎も角も、我口わがか

ら事仕出した上は我分別で結局つまりを付けねば吉兵衛も男ならずと(幸田露伴・風流仏・八・下)

・外の御邸ならば兎も角も、堀川の大殿様の御側に仕へてゐるのを、如何に可愛いからと申しまして、かように無様がしつぱに御暇を願ひますものが、どこの国に居りませう。(芥川龍之介・地獄変・五)

・おれの小説の批判をするならともかく、私生活にざぐりをいれてスキヤングル記事をでつちあげるとはけしからん。(筒井康隆・となり組文芸)

複文前句の述語に不定詞「何」を共起させた例には、次のような例がある。後句とは接続助詞「けれども」などで接続されている。

(29) イヤそりや今迄の経験で解ります、そりや掩ふ可らざる事実だから何だけれども……それに課長の所へ往かうとすれば、是非とも先づ本田に依頼しなければなりません、(二葉亭四迷・浮雲・二・一二)

・「それがね、酷ひどいんだ。他人ひとの口から言つたのなら何だけれど、あの、継母まははが我身で我身の邪慳じやくんだつたことを私に話したんだよ。(泉鏡花・照葉狂言・井筒・二)

必要があれば、これらの諸形式によつて、旧来の「あり」による醜化と類似する対比的な表現が可能になつたことも、古代語を中心に見た「あり」の醜化用法の近代語に

おける衰退傾向を助けたのであろう。古代語を中心とする「あり」の膿化用法は衰退したが、対比的な複文構造の前句において言葉を濁す類の表現法は、このように近現代語においても依然として健在である。

注

- (1) ここに取り上げる表現法に関する先行研究には、以下のようなものがある。佐伯梅友「みちのくはいづくはあれど」(『文学』昭七・四、『万葉語研究』昭三八再版、有朋堂、原田芳起「いづくはあれど考」(『平安時代文学語彙の研究』、昭三七、風間書房)、江口正弘「こそあれ」考——文型と意味——(『国語学』五五集、武山隆昭「よにおほかるそらごとだにあり」の解釈 蜻蛉日記の執筆意図にふれて)、『椋山国文学』三)、中村幸弘「ばこそあらめ」(『国学院雑誌』七八・一一)、江口正弘「源氏物語・若紫の「いたづらに沈めるだにあるを」の解釈——」だにある」の語法について——(『国語教育研究(広島大学教育学部)』二六上)、碁石雅利「ばこそあれ」考(『聖徳学園短期大学文学研究』二)
- (2) 拙著『古代接統法の研究』(昭五五、明治書院)第四章。
- (3) この名称は、拙著『古代接統法の研究』第一章による。
- (4) 山田孝雄『日本文法学概論』(昭一一、宝文館)第二十七章に、この「……しもあれ」型の例を引いて、次のようにある。
- 「しも」これは間投助詞「し」と係助詞「も」の合成せるものなるが、これにはその力甚だ強くなりて「こそ」に准ずべく、文中にありては大抵終止に曲調を生ぜしめ用言の已然

形を以てそれに応ぜしめ以て下の句に対して意義上条件となる(形はつゝかず)に至れるあり。

しかし、右の文中の「已然形」については、同書第五十七章に、同様の例を挙げ、次のごとく「命令体の形」とも言っていて、その見方に揺れも見受けられる。

次に命令体の形をとれるものにも亦時としてとりのけを示す意義を呈し仮設して反撥する場合などの意を以て一種の条件として用ゐらるゝことあり。

(5) (1)の江口論文「こそあれ」考——文型と意味——にもこの種の転義についての言及があるものの、意味変化の経路については別の解釈が示されている。

(6) 拙著『古代接統法の研究』第九章。

(7) 拙著『古代接統法の研究』第四章。